

第六回

フョードル・ドストエフスキー 『カラマーゾフの兄弟』

皆さん、こんにちは。ドストエフスキーの二回目です。まずは私のレクチャーですが、ものがものだけに小難しい話が多くなります。しばらくお付き合いください。

近代と信仰

「近代と信仰（宗教）」というのはとても大きな問題です。最初に押さえておきたいのは「近代は信仰（宗教）を否定したのではない」という点です。西欧的近代の源泉の一つとしてマルティン・ルターらの宗教改革が挙げられることから、「近代＝反宗教」という図式の間違いが分かります。

しかし近代という時代は、以前とは異なるしかたで信仰や宗教を捉えるようになりました。社会全体が近代化するなか、宗教も近代化のプロセスに組み込まれていきます。それにより宗教は、主観や理性、個人、自由などの近代的理念と関連づけて考えられるようになります。

まず、近代においては「神から見た人間」でなく「人間から見た神」が重要になります。典型的な例は「理性による神の証明」です。デカルトやカント、その他多くの哲学者がこの問題に取り組みました。しかしこういう疑問が湧きませんか——「信じているなら、なぜ証明する必要があるのか？」。実際、デカルトもカントも神を信じていました。それでも神の存在を証明しようとしたのです。彼らが人間の立場から神を捉え直そうとしていたからです。

宗教の近代化の特徴として「信仰の内面化」も挙げられます。これも「人間から見た神」の図式から導かれます。人間から見た神、それはまず「われわれにとっての神」というあり方を取るでしょう。しかし「個人」の価値を掲げる近代において、それは「わたしにとっての神」に行きつきます。自分のすべてを見てくれる大文字の他者 (the Other) としての神です。そうした存在がいればこそ、報われずとも善を行い、目立たずとも自分の生に価値があると信じられるというのはすぐれて近代的な考え方です。

宗教の近代化のもう一つ特徴として「理性との和合」も挙げられます。あまりに理性とかけ離れた要素は信仰の内容から取り除く、あるいは目立たなくしようとする傾向です。この傾向は科学の進歩に合わせ、長い時間をかけて育ちました。「不合理ゆえにわれ信ず」という古い言葉があります。本来、信仰というのはそういうものでしょう。しかし、近代の成果である科学的知識を前に、そう言い続けることが難しくなってきたのです。近代宗教は理性との和合、別の言い方をすれば、科学との妥協を可能な範囲で図ってきました。

ロシアでは、「人間から見た神」や「わたしにとっての神」、「理性との和合」などの新傾向は内的というより外的に生じました。つまり西欧から入ってきたのです。その分、性急かつ限定的に（もっぱら貴族と知識人のあいだでのみ）新傾向は影響力を持ちました。そのため新しい考え方はしばしば極端な現れ方をしました。

『カラマーゾフの兄弟』には「来世がなければすべてが許される」という有名な台詞があります。キリスト教の説く永遠の生や来世の裁きがもしも存在しなければ、人間には現世の生しかない。だとすれば人間を究極的に律するものはなく、どんな行為でも許されるだろうという議論です。「人間から見た神」の論理を極端に押し進めればこうなるという一例でしょう。

言うまでもなく、ドストエフスキー自身がこう考えていたわけではありません。来世がなくとも（あるいは来世がないからこそ）、人間には許されることと許されないことがある、ということを経験しなかったはずはありません。しかし、もし信仰の問題を完全に人間の側からのみ立てるなら、こうした極端な思想も成り立ってしまうのでないか、と考えたのでしょうか。近代的思考を突きつめていくと、人間は自分の行動を律する他者 (= 神) を失ってしまう

という不安です。

前回お話ししたように、カントの道徳哲学は「人間の理性が自らに命令する」という形式を取ります。人間の自律性、つまり人間は判断においても行動においても自分自身を律することができる、という考えは近代思想のななめです。しかしその保証はどこにあるのでしょうか。ドストエフスキーの結論は、人間には自分を律する他者（神）がどうしても必要であり、どこまでも他律的な存在であるよりない、というものだったと思われまふ。

ただ見落としてならないのは、こうしたドストエフスキーの思索は「人間から見た神」をめぐる展開されており、その点ではまったく近代的であることです。後発国の知識人たちが近代の思想と闘い、「もう一つの選択肢」を示し得た（あるいはそう信じた）ときでさえ、多くの場合、近代の枠組を越えてはいないのです。彼ら自身そのことを意識していました。

専制権力とドストエフスキー

『貧しき人々』で華々しいデビューを飾ったドストエフスキーは時の人になります。文壇の花形だったベリンスキーやツルゲーネフとも親交を結び、意気揚々としていました。

ところが第二作『分身』以降、評価が芳しくなく、ドストエフスキーは悩み始めます。周囲との不協和音も目立つようになりました。

結局、反政府的な政治結社に関わったという嫌疑でドストエフスキーは逮捕されます。裁判所の判決は四年間のシベリア流刑でしたが、皇帝ニコライ一世は満足せず、死刑判決にしようとしています。こうした点に専制君主国家というロシア帝国の国体が表れています。皇帝権力は無制限であり、司法や立法の定める手続きさえ飛び越えることが可能なのです。

「近代のプロジェクト」の一つに立憲主義というものがあります。立憲主義とは、憲法と国会によって君主（統治者）の権力を制限しようとする考えです。憲法は君主（統治者）ができること／できないことを定めた「国家と社会の契約」であり、国会は君主（統治者）が定めようとする法律を国民の代表が審議する場です。立憲主義は政治の近代化における最重要アジェンダ（目標、指針）でした。

君主の側から先手を打って憲法を發布し、国会を召集することもあります。

ハプスブルグ帝国やプロイセン王国がそうであり、プロイセンに範を取った大日本帝国もそうです。大日本帝国憲法が明治22（1899）年に発布、その翌年には第一回帝国議会在が召集されたというのは、世界的に見ても速い対応と言えるでしょう。ちなみに、二葉亭四迷の『あひゞき』初訳が出たのが憲法発布の一年前、明治21（1898）年であることも意味深い符合でしょう。政治や言語などさまざまな分野で近代化が急ピッチで進んでいたことが分かります。

ひるがえってロシアとは言えば、専制君主国家という国体に徹底的にこだわりました。憲法については何度か案が出ましたが、すべて途中で潰えました。興味深いのは、ドイツの小国から皇太子妃としてロシアに来て、夫の死後、自ら皇帝となったエカテリーナ二世です。彼女はヴォルテールやディドロと文通をするなどして啓蒙君主を任じていましたが、専制護持については一点のぶれもありませんでした。生まれも育ちも西欧人の彼女でさえ、ロシア皇帝としては専制を選んだのです。「何ものにも制限されない権力を一人の人間が行使する」という仕組は現代ロシアでも機能しており、この国の近代化をめぐる問題の奥深さをうかがわせます。

さて、死刑判決を受けたドストエフスキーはどうなったか？ 死刑場に連れていかれ、銃殺に処せられる最初の数人が杭に結わえつけられたところで、突如恩赦が告げられ、シベリア流刑となりました。もちろんこれは演出で、恩赦はずっと前に決まっていた。ロシア皇帝のなかでいちばん人気のないニコライ一世の陰險な残酷さをほうふつとさせるエピソードです。死刑直前のようすをドストエフスキーは後年、『白痴』に描きました。文字通りの「生きるか死ぬか」を体験した人だけが書けるような文章であり、この箇所だけでも読む価値があるでしょう。

流刑先のシベリアでドストエフスキーは二つのものに出会ったと言われています。一つはキリスト教で、もう一つはそれを信じるロシアの民衆です。この出会いは後年の彼の文学に決定的な意味を持ちます。

『罪と罰』（1866）で文学的復活を遂げ、ふたたび人気作家となったドストエフスキーは政治社会評論にも情熱を燃やし、『作家の日記』という雑誌を始めます。ドストエフスキー一人が評論を書くという変わった形式の雑誌ですが、かなりの成功を収めました。晩年のドストエフスキーの創作の充実と生活の安

定は、二度目の妻アンナの賢明さに拠るところが大きいのですが、その前提として長編小説と評論がよく売れたことがあります。

『作家の日記』は日記と銘打っているので、作家の個人的心情が書かれているのかと期待して読む人が多いのですが(私もそうでした)、そうではなく、彼の政治や社会に関する立場をストレートに示した評論です。そしてその立場というのはかなり保守的、もっと言えばナショナリスティックなものです。たとえば黒海の支配権をめぐる敵対するオスマン帝国や西欧列強に対して非常に攻撃的です。帝国と皇帝権力のあり方についても支持する立場に立っています。「前科者」への当局の注意を振り払うためのカモフラージュという説もありますが、それにしては『作家の日記』の論調はあまりに真剣です。

考えてみたいのは、この種の保守化はドストエフスキーに特有の現象でなく、近代後発国の知識人の一つのパタンをなすのでないか、ということです。若いときに欧米に留学した後発国のエリートが後年、保守派の論客になるケースは日本でも珍しくありません。

「近代化のレース」で先を走る国々を実際にその目で見た後発国のエリートたちは何を思ったのでしょうか。自分たちもこのレースを走り続け、「追いつき追い越せ」の精神で突き進むか、それともそんなことは空しいと思いつめるか。そもそもこのレースには一つのゴール、一つのコースしかないのか。もしかしたら、複数のゴール、複数のコースがありはしないだろうか。だとすれば、どうして専制国家でいけないことがある。自分たちの国にはその道しかないのならば、それを突き進み、彼ら先発国に伍することができないか、試してどうしていけないだろうか？

社会思想家・評論家としてのドストエフスキーの選択はこうしたものでなかったかと私は想像します。くり返しになりますが、これは彼だけの選択でなく、後発国の知識人の一つのパタンを表しています。

では小説家としてのドストエフスキーは、自分の選択をどう表現したのでしょうか。これまたくり返しになりますが、自分の信条・思想をストレートに書くことが小説家の仕事ではありません。自分が信じるものさえ、芸術表現の素材としてしまえるところに、小説家の才能が現れるのです。

『カラマーゾフの兄弟』から

思ったとおり理屈っぽい話になりました。気分直しになるかどうか分かりませんが、『カラマーゾフの兄弟』のあらすじを「反逆」という章を中心にご紹介しましょう。

〔あらすじ〕好色で猜疑心の強い小金持ち、フョードル・カラマーゾフには三人の息子がいる。情熱的なミーチャ、冷徹なイワン、そして善良そのもののアリョーシャである。フョードルとミーチャは父子でありながら、一人の女性グルーシェンカを求めて争っている。イワンはその知性によって周りに一目も二目も置かせる存在。とくにフョードルの私生児（三人兄弟にとっても兄弟に当たる）と噂されるスメルジャコフはイワンに心酔している。アリョーシャは神の道に生きようと、ゾシマ長老のもとで修道僧の見習いをしている。物語後半、フョードルは何者かに殺され、容疑者としてミーチャが逮捕されるが……。

「反逆」の章は、イワンとアリョーシャが大衆酒場でかわす対話からなっている。人間の残酷さに興味があるというイワンは四つの「実話」を話して聞かせる。一つめはトルコ兵がブルガリアで行った虐殺、とくに残忍な子殺しについて。二つめは、スイスのとある山村で犬猫同然に育てられた孤児リシャルが長じて強盗殺人事件を犯し、死刑判決を受けたという事件。慈善家たちがリシャルにキリストの愛を教え、彼は神と社会の赦しを乞いつつギロチン台に上る。三つめは、ロシアの児童虐待の話。おもらしをした五歳の女の子が罰として一晩中、寒い便所に閉じこめられたり、鞭で打たれたりする。両親は裁判にかけられたが無罪になる。最後は、十九世紀初めにロシアの地主貴族が農奴の息子を猟犬にかみ殺させたという話。こうした子どもたちの苦しみには何の意味があるのか？ もし神の崇高な目的があるとしても、子どもの涙を代価とするような楽園を自分は受け入れないと語るイワン。それに対して「子どもたちの苦しみさえ、あがなうことのできる人がいる」と答えるアリョーシャ。それはキリストのことだろうと兄は言い、以前作ったという『大審問官』という叙事詩を語り始める……。

前回、ドストエフスキーの現代性という話をしました。児童虐待の主題はそ

の一例です。イワンが語る児童虐待の事例は、今もなくなるしないこの種の事件によく似ています。児童虐待のニュースで心胆寒からしめるのは、「しつけ」と称するサディスティックな念の入りようですが、そのサディズム的心理と快感をドストエフスキーは百五十年も前にとらえていました。人間の残酷さは自然界には見られないもので、まさにイワンの言うように「野獣は決して人間みたいに残酷にはなれないし、人間ほど巧妙に、芸術的に残酷なことにはできない」のです。

イワンがトルコ・スイス・ロシアの順で残酷話を並べているのは、もちろん意図的です。近代化の遅れた野蛮な「東」、近代化の進んだ「西」、そしてその間にいる自分たち、という構図でしょう。近代化——言いかえれば「文明」——の進み具合に関わらず、人間の残酷さに変わりはないという作家自身のメッセージでしょうか。二十世紀のさまざまな出来事を思い出すとき、ここでもドストエフスキーの慧眼を認めざるを得ません。

イワンの話は「子どもの苦しみの対価」という主題をめぐる展開します。子どもたちはなぜ苦しまなければならないのか。教会は言うだろう——そこには人知を超えた神の摂理が働いている。世界の終末にそれが明らかになり、至福の調和が実現するとき、迫害者と犠牲者が抱き合って許し合うのだ、と。だが、そんな調和は自分は認めない。なぜなら理由も分からず苦しんだ子どもたちの涙は償われないからだ。「どんな真理だってそんなべらぼうな値段はしない」、だから自分は理想の世界への入場券はお返りする。イワンのこの論理は、無神論ではありません。神の摂理を理解した上で、なおそれを受け入れないという「反逆」の論理です。

いや、すべての苦しみを償うことのできる存在が一人だけいる、なぜならその人自身、罪なくして万人のために苦しんだのだから、とアリョーシャが応じます。もちろん、キリストのことです。しかし、それに対してもイワンはすでに答えを用意しており、次章の『大審問官』で「パンと自由」という有名な議論をくり広げます。「パン」とは教会の命ずる通りに信じることで得られる心の安らぎです。対して「自由」とは自らの意志によって神を探し求める、不安とともにある信仰です。だが人類の圧倒的多数は「パン」を求め、「自由」に留まる者はごくわずかだというのがイワンの作意です。これも現代社会に迫る問いか

けであり、ドストエフスキーの現代性を示しています。

こういう対話篇を読んでいると、「やっぱりキリスト教を知らないと分からないな」と思う方もいるかもしれません。そこはちょっと待ってほしいのです。じつは、ここでは「文脈の二重化」ともいうべき現象が起きています。一方ではキリスト教的文脈で問いかけて議論がなされますが、他方、近代化の文脈でも読み解ける構造になっているのです。ドストエフスキーは第二の文脈も強く意識しています。

「真理の値段」、「べらぼうな入場料」といったイワンの議論は近代のプロジェクトについても、キリスト教の教えと同じくらいよく当てはまります。近代は自由と平等を掲げ、文化的・物質的豊かさを約束しましたが、その恩恵を受け取れず貧しさに苦しむ人々はたくさんいました。彼らの犠牲の上に近代はその花を咲かせたのです。近代化の恩恵もまた「べらぼうな入場料」を人類に強いている、それでも近代万歳と言えるのか、とドストエフスキーは問いかけています。

一つの物語をしながら、同時に二つの読みに誘う、——一方では神学・哲学的文脈（神や自由の問題）、他方では近代批判の文脈（恩恵の不平等の問題）——、これがドストエフスキー文学の最大の発明だったかもしれません。哲学的な物語が世俗的な文脈で読み解け、逆に、世俗的な物語も哲学的な解釈ができるという意味での「文脈の二重化」です。

彼の小説が幅広い読者層を持つのも、この文学的発明のおかげだと思われまます。『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』は、殺人事件をめぐるストーリーが展開するので、推理小説のように読めて取っつきやすい。他方、自我や信仰といった問題に悩む読者もイワンの哲学的議論やアリョーシャのキリスト的形象に心惹かれます。要するに、俗っぽくも高尚にも読めるわけで、この両面性こそドストエフスキー文学が持つ現代的魅力の秘訣でしょう。彼の作品がいわゆる正統派の文学にも、ライトノベル系の文学にも強い影響を及ぼしているのは注目すべき現象と言えるでしょう。

読書ガイド

フョードル・ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（全3巻）原卓也訳、新潮文庫、1978年。
フョードル・ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（全5巻）亀山郁夫訳、光文社古典

新訳文庫、2007年。

フョードル・ドストエフスキー『作家の日記』（全6巻）小沼文彦訳、ちくま学芸文庫、1998年。
井桁貞義『ドストエフスキイと日本文化——漱石・春樹、そして伊坂幸太郎まで』教育評論社、
2011年。

ヤコフ・ゴロソフケル『ドストエフスキーとカント『カラマーゾフの兄弟』を読む』木下
豊房訳、みすず書房、1988年。

高橋誠一郎『「罪と罰」の受容と「立憲主義」の危機』成文社、2019年。